

希少生物への影響懸念

竹原LNG火電計画 研究者が意見書

竹原市内で計画が進んでいる液化天然ガス(LNG)火力発電所とLNG貯蔵施設について、国内外の海洋生物研究者が、事業を進めるJBGエナジー(東京)

などに意見書を送っていたことが11日、分かった。建設予定地が希少生物の生息する「ハチの干潟」に近い

ため、影響を与える可能性を指摘している。

意見書は2点。佐藤正典(鹿児島名誉教授(底生生物学)たち3人と、スイスに本部がある国際自然保護連合(IUCN)カブトガニ専門家グループの2人がそれぞれまとめ、同社と、ドイツにあるグループの本

社機能を担う企業に7月30日付で郵送した。

佐藤名誉教授たちの意見書によると、ハチの干潟と周辺海域には絶滅の危険があるカブトガニなどの希少種が多く生息し、研究や教育の重要な場所にもなっていると説明。計画にある海上への棧橋設置で潮流が変



わり、干潟の堆積物が変化すると「カブトガニの産卵などに大きく影響する」などと指摘し、再検討を促している。

米国の大学などに在籍するIUCNの専門家の意見書は「生物への影響を評価し、悪影響を与える可能性

がある場合は代案の検討を強く勧める」と訴えた。

JBGエナジーのLNG火電計画は、竹原市下野町の海沿いの約7畝が予定地。出力7万4千瓩の発電所のほか、海外から船で調達したLNGの貯蔵施設を海上に浮体式で設ける構想となっている。

同社の広報窓口となる会社は中国新聞の取材に「意見書の内容を十分に精査・検討する。個別案件の詳細についてはコメントを差し控える」としている。

(渡部公揮)